

「関心・意欲・態度」を育てる家庭、技術・家庭科の学習指導

—授業における情意への働きかけ—

家庭、技術・家庭科研究会議

望月 隆¹

井上 真理²

齋藤健太郎³

中尾由美子⁴

要 約

観点別学習状況として示された評価の観点は、現行学習指導要領に示す各教科の目標や内容を踏まえ、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力などの資質や能力の育成に重点を置くことが明確になるよう、基本的に「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4つで構成されている。

「関心・意欲・態度」の観点は評価が難しいといわれるが、この観点を評価する前に、まずはどのように育てていけばよいのか。「教育目標の分類学(タキソノミー)」に則って考える中で「関心・意欲・態度」の育成には、「情意への働きかけ」を行うことが有効であることがわかった。

一方、授業においてどのような働きかけを行えば、「関心・意欲・態度」を育てることができるのか。本研究会議では、「情意への働きかけ」を児童生徒の「心情をゆさぶる」ことととらえ、「感覚や感性を刺激する活動」と「継続的な感想記載活動」の2つの指導方法について題材を通して検証をしたところ、その効果が見えてきた。

さらに、育てた「関心・意欲・態度」は何を資料に、どのような規準で評価すればよいのか。本研究会議では、授業中に表出する一時的な「関心・意欲・態度」を観察して評価するのではなく、題材前後に記載した感想用紙の変容から評価するという、長期的な評価方法を実践した。

キーワード：関心・意欲・態度、指導方法、評価方法、情意への働きかけ

目 次

I 主題設定の理由……………98	5 検証と考察……………105
1 はじめに……………98	(1) 小学校家庭科……………105
2 川崎市における最近の研究から……………98	(2) 中学校技術・家庭科 技術分野……………107
3 「関心・意欲・態度」の実態調査……………99	(3) 中学校技術・家庭科 家庭分野……………109
4 総合教育センターの研究総括主題から……………99	III 研究のまとめ……………111
II 研究の内容……………99	1 研究から見えてきたこと……………111
1 研究目的……………99	2 今後の課題……………112
2 研究方法……………100	参考文献……………112
3 「関心・意欲・態度」を育てる指導方法……………101	指導助言者……………112
4 「関心・意欲・態度」の評価方法……………104	

¹川崎市立生田中学校教諭（長期研修員）

²川崎市立宿河原小学校教諭（研修員）

³川崎市立京町中学校教諭（研修員）

⁴川崎市立高津中学校教諭（研修員）

I 主題設定の理由

1 はじめに

平成18年2月に発表された中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の審議経過報告では、学力に関する考え方の中で「学ぶ意欲や知的好奇心を育て〔確かな学力〕を育成することは、学校教育の基本的な役割である」とし、それをはぐくむ道筋（手立て）を明らかにすることを求めている。

「学ぶ意欲」が重視されるようになったのは、平成元年（1989）改訂の前学習指導要領においてである。この中で「新しい学力観」が提唱され、自ら学ぶ意欲、社会の変化に主体的に対応できる能力、一人一人のよさと可能性を重視する教育などが強調され、児童生徒の「関心・意欲・態度」を育てることが学習指導の主要課題の一つとなった。

しかし、「新しい学力観」から10年以上が経過した現在においても、「関心・意欲・態度」の観点における指導と評価には課題が残されており、学校教育においてこの観点の評価が確立されていないとする考え方も示されている¹⁾。

実際、筆者も4観点を評価する上で「関心・意欲・態度」の評価が最も難しいと感じていた。それは、この観点は評価対象を特定することが困難だからである。「知識・理解」の「ある・ない」や「技能」の「できる・できない」は規準と比べることで明確に評価できるのに対して、「関心・意欲・態度」はどのような場面で、どのような行動を評価すればよいのかを定めるのが難しいからである。

そこで、本研究会議では川崎市における家庭、技術・家庭科の「関心・意欲・態度」に関する過去の研究を調査したり、中学校で指導する教員に対して実態調査を行ったりすることで現状を分析することから研究を開始した。

2 川崎市における最近の研究から

平成16年度の家庭、技術・家庭科研究会議では「生活者としての実践力を育てる」ことをめざし、学校で学んだ学習内容を家庭における実践につなげようとする研究が行われた。そのまとめの中で「子どもの情意に働きかけて、生活への関心や意欲を喚起したり、意欲の持続や向上を図ったりすることによって、子どもの学習への姿勢が主体的になる」としている。ただし、有効な手立てや活動については「見えてきた」という表現にとどめており、今後の課題として残した²⁾。

平成17年度の中学校技術・家庭科の事例集では「技術・家庭科における学びの質を高めるしくみ」を図示し、「根茎（関心・意欲・態度）を育成し、葉（基礎・基本）を定着させ、開花、結実（生活に役に立つ3つの能力育成）をめざす」としている³⁾。

平成17年度の小学校家庭科の事例集では「『子どもがかかわる・子どもがつくる・子どもが営むよりよい生活』をめざす家庭科」という主題で研究を行い、実践力を育てる授業展開の工夫の中で「子どもの情意に働きかける」ことを重視し、これを組み込んだ事例を紹介している⁴⁾。

いずれの研究も「関心・意欲・態度」の観点に着目しており、この観点の重要性について述べられている。しかし、「関心・意欲・態度」を育てるための指導方法や評価方法については系統だてた研究が行われていない。

¹⁾ 長瀬 荘一 『関心・意欲・態度（情意的領域）の絶対評価』 明治図書 2003 p. 56

²⁾ 家庭、技術・家庭科研究会議「生活者としての実践力を育てる 家庭、技術・家庭科の学習」
川崎市総合教育センター研究紀要第十八号 2005 p. 125

³⁾ 川崎市教育委員会・川崎市立中学校教育研究会『中学校学習指導事例集技術・家庭科』2006 p. 4

⁴⁾ 川崎市教育委員会・川崎市小学校教育研究会『小学校学習指導事例集家庭科』2006 p. 9

3 「関心・意欲・態度」の実態調査

川崎市の公立中学校で技術・家庭科を指導する教員 87 名に、「関心・意欲・態度」の観点に関する実態調査を 4 月に行った。その中で評価資料について調査した結果を図 1 に示す。

技術分野、家庭分野ともに「授業中の様子」や「ワークシートの内容」を中心に評価していることがわかった。

その一方で、技術分野で「授業中の服装」を 42%、「授業への欠席、遅刻」を 36%の教員が評価資料としている。

家庭分野においても「授業の忘れ物」を 38%、「宿題をしてきたか」を 31%の教員が評価資料としている。

観点として示された「関心・意欲・態度」は教員が育てる資質や能力であるため、授業の中で表出した行動や態度を評価するという現状には課題があると考えられる。

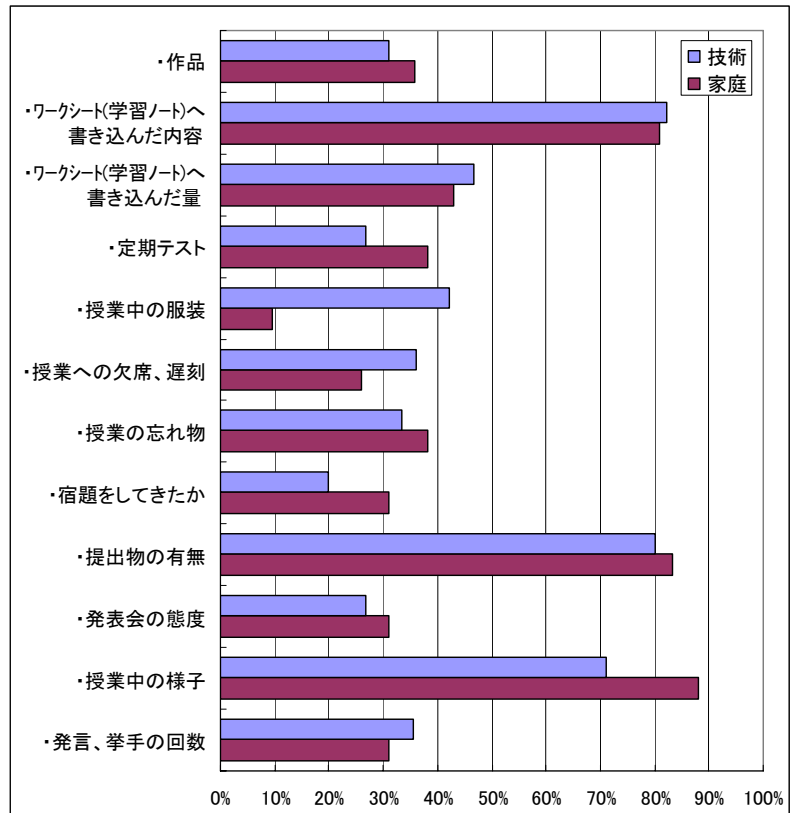


図1 「関心・意欲・態度」の評価資料

4 川崎市総合教育センターの研究総括主題から

川崎市総合教育センターでは、子どもや大人にとっての「学び」と、共に生きるための教育としての「共生」を基点にした教育の在り方を重視して、「豊かな学びをはぐくむ川崎の教育の創造—共生を軸にして—」<「自ら学ぶ」「共に学ぶ」「学び続ける」>という総括主題を掲げ、研究を進めている。

豊かな学びのためには学習意欲の育成が不可欠であり、「関心・意欲・態度」を育てることは総括主題のめざす方向と同じであると考えられる。

これらのことを踏まえ、次のように主題を設定した。

**研究主題 「関心・意欲・態度」を育てる家庭、技術・家庭科の学習指導
—授業における情意への働きかけ—**

II 研究の内容

1 研究目的

本研究は小学校家庭科と中学校技術・家庭科の授業において、児童生徒の情意に働きかける学習指導を行うことで、「関心・意欲・態度」を育てて評価することを目的としている。

そのために「関心・意欲・態度」を育てる指導方法について追究し、指導計画を作成するとともに、授業の中で題材を通して「情意への働きかけ」を行うことにより、検証する。

また、育てた「関心・意欲・態度」を評価する方法についても、授業中に表出する一時的な「関心・意欲・態度」を追いかけるのではなく、「生活や技術（家庭生活）への関心・意欲・態度」を評価するための方法を実践することにより、検証する。

2 研究方法

(1) 研究仮説

主題設定の理由を受け、仮説を次のように設定した。

家庭、技術・家庭科の学習指導において、次の2点に着眼した情意への働きかけを授業で行えば、「生活や技術（家庭生活）への関心・意欲・態度」を育てて評価することができるであろう。

- ① 感覚や感性を刺激する活動
- ② 継続的な感想記載活動

(2) 研究構想図

研究の構想を図2として示す。

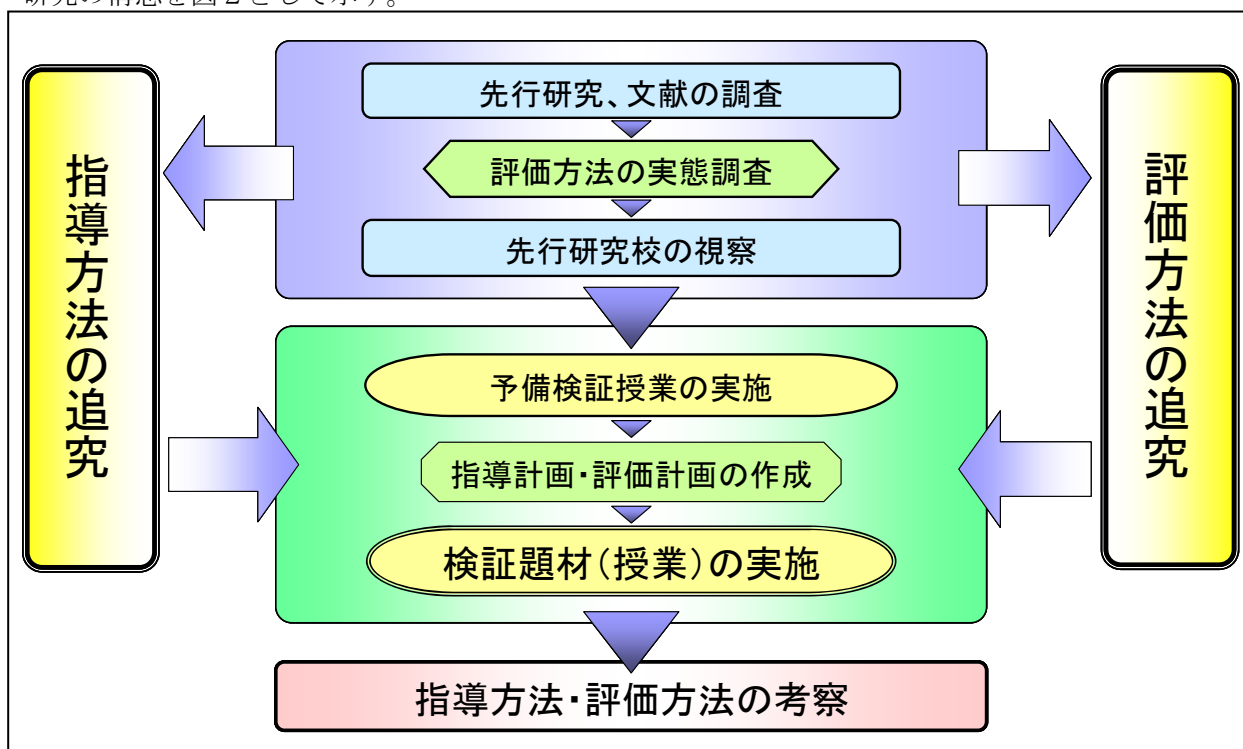


図2 研究構想図

(3) 指導方法の検証

指導方法を検証するために、題材の前後に同じ内容でアンケートを実施した。評価方法は質問紙法とし、評価技法には中心化傾向を避けるため4段階の評定尺度法を使用した。

質問項目は「学習への取組」、「学習した内容への関心」、「学習した内容を家庭生活上で生かす意欲」、「学習した内容を家庭生活上で実践する態度」の4つの意味的まとまりごとに各3～5問ずつの質問で構成した。児童生徒の答えが題材前後で変化したかを統計的に検討することで、指導方法が有効で「関心・意欲・態度」を育てることができたかを検証した。

(4) 評価方法の検証

評価方法の検証については、児童生徒の題材学習前後に記入した感想用紙を評価資料とし、評価規準を作成した後、授業者（研修員）と長期研修員が別々の場所で「関心・意欲・態度」の評価を行った。評価結果の一致率を求めることで評価方法の妥当性を検証した。

(5) 研究の対象と検証題材（9月～11月実施）

検証題材の選定においては、それぞれの学校の学習進度に合わせているため、小学校と中学校の関連性はない。ただし、本研究の仮説は特定の題材を対象とするものではないため、この題材においても検証は可能だと考えた。

①小学校家庭科

川崎市立A小学校第6学年 32名 「快適な住まい方ポイント」(11時間構成)

②中学校技術・家庭科技術分野

川崎市立B中学校第2学年 28名 「身の回りにある情報を処理しよう」(10時間構成)

③中学校技術・家庭科家庭分野

川崎市立C中学校第1学年 30名 「考えよう 快適で安全な住まい」(8時間構成)

3 「関心・意欲・態度」を育てる指導方法

「関心・意欲・態度」の指導や評価を行うことが難しい理由の一つに、この観点の概念と構造が容易でないことが挙げられる。そこで、家庭、技術・家庭科の4観点の分類や他の3観点との関連性に着目して、指導方法を追究した。

(1) 家庭、技術・家庭科の4観点の分類

B.S.ブルムらによる「教育目標のタキソノミー(分類学)」⁵⁾をもとに家庭、技術・家庭科の4観点を分類したものを表1に示す⁶⁾。さらに長瀬が情意的領域をカテゴリーごとに細分化し、「関心」「意欲」「態度」を対応させたものを表2に示す⁷⁾。

表1 家庭、技術・家庭科の4観点の分類

関心・意欲・態度……………	情意的領域
創意工夫、工夫し創造……	認知的領域
技能……………	技能運動的領域
知識・理解……………	認知的領域

表2 情意的領域の評価カテゴリー

情意的領域のカテゴリー		義務教育段階における情意的領域		
		関心	意欲	態度
①受容 (注意と気づきの獲得段階)	①-1 (感知) ~に気づく。	○		
	①-2 (積極的受容) ~に注意して~する。	○	○	
	①-3 (注意の集中・選択) ~に注意を集中させる。	○	○	
②反応 (興味と関心の深まり段階)	②-1 (反応の黙認) 言われたとおりに~する。	○	○	
	②-2 (自発的反応) 自分からすすんで~する。	○	○	○
	②-3 (反応の満足) よろこんで~する。	○	○	○
③価値づけ (積極的意欲の高まり段階)	③-1 (価値の承認) ~のよさを見つけて~する。	○	○	○
	③-2 (価値の選択) ~のよさを選んで~する。	○	○	○
	③-3 (価値への傾倒) ~のよさを信じて~する。		○	○
④価値の体制化 (実践的態度高まり段階)	④-1 (価値の概念化) ~の価値を認めて~する。			○
	④-2 (価値体系の体制化) ~について自分の価値を高めて~する。			○
⑤価値による人格化 (普遍的態度の形成段階)	⑤-1 (一般化された構え) ~について普遍的な自分の価値観をつくりあげる。			
	⑤-2 (人格化) ~について確固たる自己の価値観をともなって~する。			

これにより、「関心」「意欲」「態度」は並列ではなく、まず「関心」、次に「意欲」、最後に「態度」を育てていけばよいということがわかった。

そして、目標がはっきりしたため、「関心・意欲・態度」を育てるには「①受容」から「④価値の体制化」に向けて指導していけばよいということが明確になった。

(2) 家庭、技術・家庭科の4観点の関連性

「関心・意欲・態度」と他の3観点は、学習の過程において個別ではなく関連して育成されていく⁸⁾。その段階ごとの関連を図3に示す。

⁵⁾ B.S.ブルム著、渋谷他訳『教育評価法ハンドブック-教科学習の形成的評価と総括的評価-』第一法規 1973

⁶⁾ 技能運動的領域はデイブ(Dave,R.H.1969)の試案

⁷⁾ 長瀬荘一『関心・意欲・態度(情意的領域)の絶対評価』明治図書 2003 p.168

⁸⁾ 中村祐治他編著『これならできる 授業が変わる 評価の実際』開隆堂 2006 p.92

第1段階では児童生徒の中に、「関心」と「意欲」を喚起し、意識化させることで学習の動機づけを行う。

第2段階では「関心・意欲」を「技能」や「知識・理解」と結びつけて相互に育てる。さらに、「工夫し創造（創意工夫）」に結びつけることで4つの観点を育てる。

第3段階では実践的な「態度」を育てることで、教科の目標の達成をめざしていく。

指導の段階によって中心となる観点が違いがあるため、段階については常に意識をしておくことが重要である。

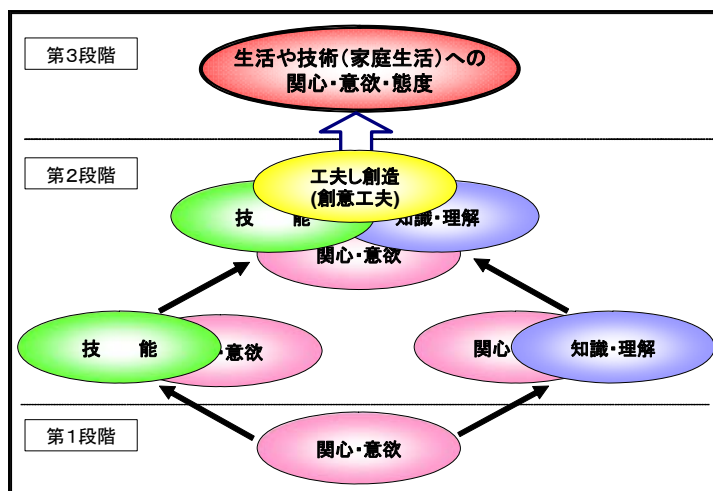


図3 4観点の関連性

(3) 「関心・意欲・態度」を育てる指導の特徴

「関心・意欲・態度」を育てる指導には、いくつかの注意すべき特徴が見られるが、本研究会議では他の3観点到比べて、指導効果上がるのに時間を要する点に着目した。

これは「関心・意欲・態度」が一時的な傾向ではなく、日常的な考え方や行動としてあらわれるのには時間がかかるためである⁹⁾。したがって「関心・意欲・態度」を育てる指導は、長期的な視点に立って題材のねらいを明確にして、その上で授業を積み重ねていくことが重要である。

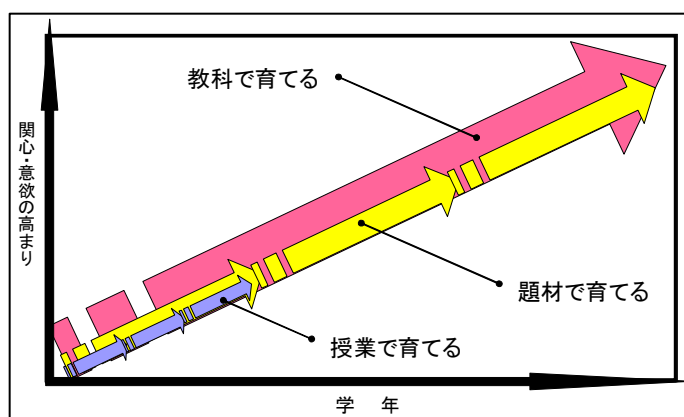


図4 長期的な育成の視点

(4) 情意への働きかけ

長瀬によれば情意的領域の指導とは「子どもの心が動くような働きかけ、子どもの意思が活かされる指導過程を組み、子どもの生きる有り様や姿となって結実するよう教育的支援すること」¹⁰⁾である。そこで、本研究会議では情意に働きかけることを児童生徒の「心情をゆさぶる」ことととらえた。「心情をゆさぶる」とは、児童生徒に「すごい」「やってみたい」「できるようになりたい」「家でもやりたい」といった気持ちをもたせることである。

そのための指導方法として、情意的領域のカテゴリーである「受容」や「反応」をさせるために、児童生徒の「感覚や感性を刺激する活動」を授業に取り入れた。

また、感覚や感性を刺激して育てた「関心・意欲・態度」を定着させるために、書く活動にも着目し、「継続的な感想記載活動」に取り組んだ。中村によれば「書くという機能には、記録として残す以外に、整理、まとめ、再構築、再構成の機能があり、作業や実習で得たことを教科のねらいに結びつける」¹¹⁾ことができるからである。

以上の理由から、次の2つの指導方法について題材を通して実践することにより、検証を行った。

⁹⁾ 金井達哉『中学校 関心・態度—その理論と指導と評価—』日本図書文化協会 1985 p. 53

¹⁰⁾ 長瀬荘一『関心・意欲・態度（情意的領域）の絶対評価』明治図書 2003 p. 218

¹¹⁾ 中村祐治他編著『これならできる 授業が変わる 評価の実際』開隆堂 2006 p. 101

①感覚や感性を刺激する活動

感覚を刺激するためには「見る」「聞く」「触る」「嗅ぐ」「味わう」といった体験をするための教材や教具を準備したり、活動の場面を設定したりした。具体的には、材料や工具の実物を見たり、触ったり、器具を使って様子を観察したり、食材を嗅いだり、味わったりするような体験的な活動を通して、授業の中に問題解決的な学習を計画的に組み込んだ。

また、「感動」「興味」「驚き」「喜び」といった感性を刺激するために、教師やゲストティーチャーが示範したり、視聴覚教材や実物見本、完成見本を用意したりした。さらに、ペア学習やグループ学習の形態を取り入れることで相互啓発¹²⁾を行い、児童生徒同士が互いに刺激を受ける場面も計画的に設定した。

題材を通してこの活動を行うことで、児童生徒の「関心・意欲」を喚起して育てることをねらった。

②継続的な感想記載活動

題材で軸となる言葉をキーワードとして定め、そのキーワードに対する感想（気づき）を授業ごとに継続して記載していく活動である。

具体的には、題材の最初にキーワードに対する「初発の感想」を15分程度で記入させた。書き方の形式などは特に指定せず、自分の気持ちに向き合うように指導した。この活動により、児童生徒の中にある無意識の「関心」を意識化するきっかけをつくった。

次に、毎時間の授業の最後に5分程度でキーワードに対する「授業ごとの感想」を記入する活動に取り組みせ、題材を通して続けた。記入した感想を交流させることで相互啓発を行い、児童生徒一人一人の内面により変容をもたらすようにした。また、記入された感想に対して教師がコメントをつけることで、児童生徒の書こうとする気持ちに働きかけを行うとともに、感想の書けない児童生徒への支援を行った。

題材の最後に、学習のまとめとして15分程度で「終末の感想」を記入させた。その際、自分が書きためた「初発の感想」と「授業ごとの感想」を見ながら記入するように指示した。そして、書きためた感想用紙を見比べることで、児童生徒に自分自身の変化に気づかせ、「関心・意欲」の成長を確かなものにすることをめざした。

この活動により、児童生徒の中に「関心・意欲」を育てるとともに、育った「関心・意欲」を定着させ、態度の形成につなげていくことをねらった。

The figure shows three types of reflection sheets used in the lesson. Each sheet has a header with the date (学期 (月) 日) and a title. The first sheet is titled '住まいの学習を始める前に' (Before starting learning about housing) and contains a large box for '題材初発の感想' (Initial reflection on the topic). The second sheet is titled '授業の振り返りシート' (Lesson reflection sheet) and contains a table for '授業ごとの感想' (Reflection on each lesson). The third sheet is titled '住まいの学習を振り返ろう' (Let's reflect on learning about housing) and contains a large box for '題材終末の感想' (Final reflection on the topic). At the bottom of each sheet, there is a space for the student's name (1年 組 番 名前).

日付	学習内容・作業内容 わかったこと・わからなかったこと で書こう。で書こう。	「関心できる住まい」について 気づいたこと・思ったこと・書こう。	先生の コメント
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			

図5 3種類の感想用紙

¹²⁾ 安彦忠彦『自己評価を生かした授業の創造』明治図書 1999 p. 21

4 「関心・意欲・態度」の評価方法

(1) 感想用紙を資料とした評価

感想記載活動で使用した3種類の感想用紙を用いることで、「関心・意欲・態度」を評価した。生徒の書いた「初発の感想」と「終末の感想」を比較し、題材を通して育てた「関心・意欲」の変容に着目することで、生徒の内面にある心情の育ちを感想用紙から読み取る¹³⁾。

変容の読み取りは、「量」→「質」→「情意」の順に3段階で行った。

第1段階としては児童生徒が感想用紙に記載した「量」が増えたかどうかを比べ、関心が広がったかどうかを評価した。

第2段階としては記載された内容の「質」が変化したかどうかを比べ、関心が深まったかどうかを評価した。

第3段階としては終末の感想用紙の記載内容や自己評価の理由に「情意」的な内容があるかどうかを判定し、心情が育ったかどうかを評価した。

学年や学習状況に照らし合わせて、児童生徒が到達する段階を想定した評価規準を設定することで、客観的な評価を行うことをねらった。

(2) 題材学習後の自己評価

「終末の感想」の記入欄の下に「学習を通して（キーワード）への関心が高まったと思うか」という質問を入れ、4段階の評定尺度（◎○△×）で自己評価を行い、その理由を記入させた。自己評価を行うことで児童生徒自身に学習の取組に対する自信をつけたり、自省したりすることをねらったものである¹⁴⁾。

さらに、児童生徒の答えを数値化することで、全体的な傾向をつかむとともに、指導方法や評価方法が有効であったか分析するために利用した。

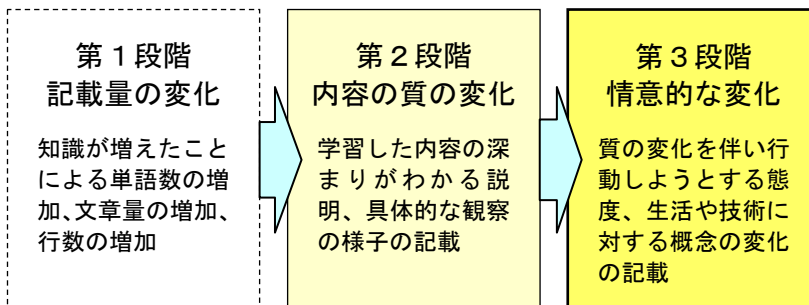


図6 「関心・意欲」の変容の読み取り

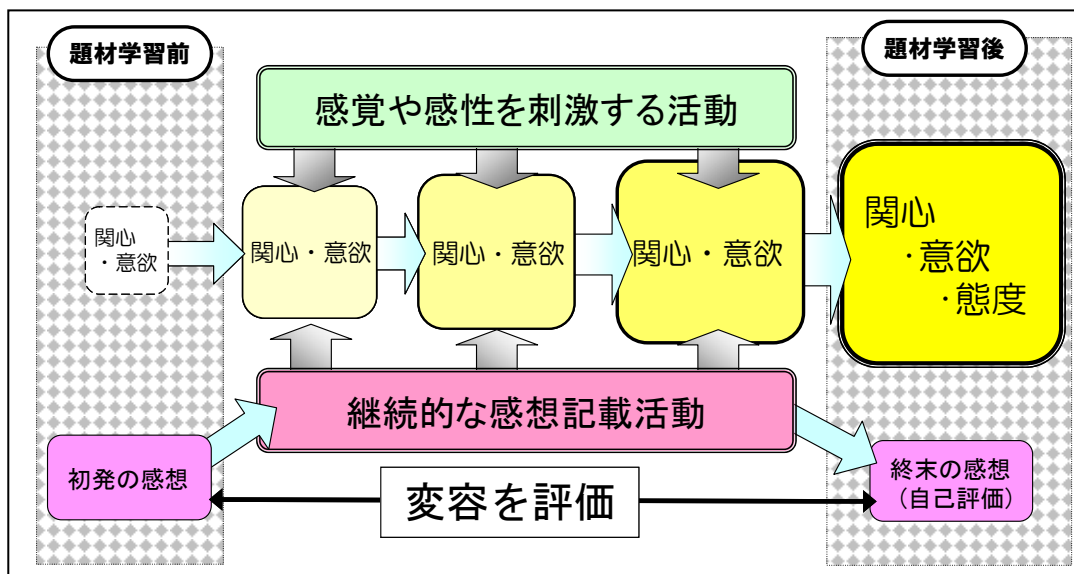


図7 指導方法と評価方法の構想図

¹³⁾ 尾崎 誠・中村祐治「技術・家庭科における『関心・意欲・態度』の評価に関する研究」日本教材学会教材学研究第16巻 2005 p.181

¹⁴⁾ 安彦忠彦『自己評価を生かした授業の創造』明治図書 1999 p.1

5 検証と考察

(1) 小学校家庭科

①検証題材の概要

題材名	「快適な住まい方ポイント」
時間数	11 時間
軸としたキーワード	「快適に住む」

「快適に住む」ための手立てや工夫について家庭生活を調べて解決したい課題をもち、調査や実験をもとに解決し、家庭生活で実践することを促す題材である。児童が快適に住むための方法を、近隣の人々との調和を視野に入れて考えられるようにしたいと思い、本主題を設定した。

児童は家の人を整えてくれた「快適」を当然のこととして生活している状態である。快適に住むための手立てや工夫について、自ら関心をもって家庭生活について観察したり疑問をもったりする力を身につけさせるために、問題解決的な学習になるように心がけた。

②題材の指導計画と情意への働きかけ

学習内容	児童の活動	育てたい関心・意欲・態度	情意への働きかけ
快適に住むってどんなこと? (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 快適に住むとはどんなことを考える。 窓のない家と、窓のある家の模型を見比べて感想をもつ。 実際に窓のない部屋に入り、感想をもつ。 家庭ウォッチングの視点をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 「快適に住む」とはどんなことかについて、自分の生活経験や体験をもとに考えようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 窓のある家とない家の模型を提示して、生活と結びつけて関心を喚起する。 窓のない部屋で、蒸し暑さや空気の悪さを体感したり、グリーンチェッカーで空気の様子を観察したりすることで快適に住むことへの関心を高める。
	(家庭ウォッチング)		<ul style="list-style-type: none"> 家庭ウォッチングした内容を教室に貼り出し、学習内容への関心を向上させる。
快適に住むための工夫を探そう (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 家庭で調べた「快適」とその工夫について発表し合う。 快適な住まいにするために、疑問に思ったことや、調べてみたいことを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> わが家の工夫を調べ、発表したり、聞いたりしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭ウォッチングした内容を伝え合い、各家庭の様子や工夫を共有することで、自分の家庭への関心を高める。
快適な住まい方を考えよう (4時間)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の課題を明確にし、解決する方法を考える。 課題を調査したり、実験したりして明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 快適な住まいにするための課題について、調査や実験方法を考えようとする。 自分の課題を解決するために意欲的に実験や検証、調査に取り組もうとする。 	
快適に住むためにわたしたちができること (4時間)	<ul style="list-style-type: none"> まとめた調査結果を発表し合い、自分にできることを探す。 <p>(家庭実践)</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭での実践報告をする。 みんなが自分だけの快適を追求したらどんな住環境になるかを考える。 誰もが快適に住むために、どんなことができるかをグループで話し合い、提案の準備をする。 誰もが快適に住むために、自分たちができることを提案する。 題材の学習を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の調査結果に関心をもって聞いたり、発表したりする。 自分にできることがあることに気づき、実践しようとする。 近隣の人々との生活に関心を持ち、快適に住むためには相互の配慮が必要であることを考えようとする。 近隣の人々との相互の配慮や調和を考えた快適な住まい方の工夫について考えようとする。 近隣の人々との相互の配慮や調和を考えた快適な住まい方を実践しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ポスターセッション形式をとることで、自分の興味のある発表を重点的に聞けるようにして、学習意欲を高める。 家族からのコメントをもらい、家庭での実践を継続する意欲とする。 近隣の人々との生活でのよいところや悪いところを自由に伝え合うことで、相互配慮の大切さへの関心を高める。 聞き手がよいと思った提案項目にドットシールを貼ることで、提案内容への関心を高め、実践につなげる。

③感想用紙の評価

表3 評価基準と状況例 (小学校家庭科)

評価基準	快適に住むことに関心をもち、学習した内容を生活に生かそうとしている。
Aと判断される状況例	記載量が増加し、快適に住むことを家庭での実践と結びつけて考えるなど、行動しようとする姿勢が見られる。
Bと判断される状況例	記載量が増加し、快適に住むことに関する具体的な記述が見られる。

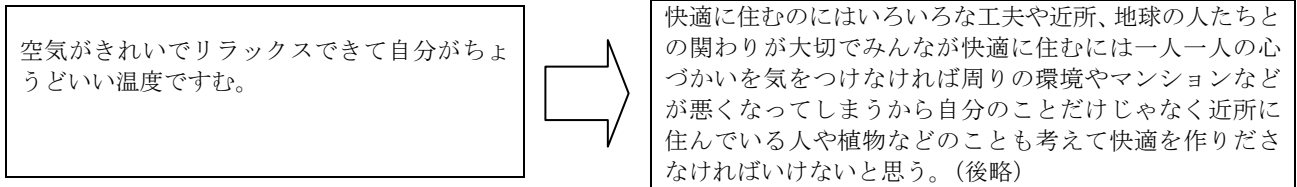


図8 題材前後の記載内容の変容例 (小学校家庭科：評価A)

書かれた内容を前述の基準で評価したところ、Aが34%、Bが53%、Cが13%となった。初発の感想を見たところ32人中14人が1行程度の内容しか書くことができなかったが、終末の感想では1行程度しか書けない児童は3人だけで、ほとんどの児童は大幅に記載量が増加した。

終末の感想の児童の自己評価において、「快適に住むことへの関心が高まったか」という質問に対して◎(カンペキ!バッチリ!)または○(まあまあ)とした児童が89%に達した。その理由として、「自分から努力していけば、きっと快適でいられると思う。」などと記載されていた。

これは、毎回の学習にて自分の生活を調べたり思い起こしたりしたこと、家庭実践する時間を設けたことに加え、毎時間振り返り(感想)を記入したことが主な要因であると考えられる。

④アンケート結果

表4 題材前後のアンケート結果(n=31) 最大値4.0

題材前後の児童へのアンケート結果では4つのまとまりにおいて有意な差は見られなかったが、「学習への取組」のうち、「自分なりのめあてをもって家庭科の学習をしようと思っている」($t(30)=2.74, p<.05$)、「家庭科では、課題が解決できるようにまじめに考えている」($t(30)=3.09, p<.05$)という質問に対しては、有意な向上が見られた。

	学習への取組	学習内容への関心	学習内容を生活に生かす意欲	学習内容を生活で実践する態度
題材学習前 (標準偏差)	2.62 (0.84)	2.62 (0.85)	2.74 (0.89)	2.49 (0.94)
題材学習後 (標準偏差)	2.79 (0.80)	2.80 (0.85)	2.84 (0.90)	2.44 (0.89)
t 値	1.24	1.24	0.62	-0.36

⑤考察

「学習への取組」のまとまりで有意な向上が2項目あり、「快適に住む」ことや本題材の学習への高まりが見られた。情意への働きかけが多少なりとも有効に働いた結果であると考えられる。本題材は自分で課題をもって自分で追究する学習形態だったため、「自分なりのめあてをもって学習しようと思っている」という項目において有意な向上が見られたのだと思われる。児童は、題材を通して自分が家庭で見つけてきた課題を一生懸命解決しようとしていた。

一方で、家庭生活で実践しようとする態度に関しては、有意な差が見られないものの数値が下がった。これは、本題材で出された「快適に住む」ための工夫が、すぐには実践に移すことが難しい内容であることが一つの理由だと考えられる。誰もがすぐに実践に移しやすい内容ではないことは確かではあるが、実は何気なく生活に取り入れているものもたくさんある。例えば、明るさに関していえば、まぶしければカーテンを閉め暗ければ開けるなど、何気なく行っていることが工夫であること、そして、それが快適に住むために大切であることを伝えきれていなかった。

学習した内容への関心や意欲が有意に向上しなかったのは、題材後半の授業形態で情意への働きかけが弱かったためだと考えられ、長期的な情意への働きかけについて再考する必要がある。

(2) 中学校技術・家庭科 技術分野

①題材の概要

題材名	「身の回りにある情報を処理しよう」
時間数	10 時間
軸としたキーワード	「コンピュータでできること」

パーソナルコンピュータで扱う様々な応用ソフトウェアを効果的に使用することにより、情報を処理できる能力が大幅に広がり、生活を豊かにすることができる。本題材では生活の中で広く使われているパーソナルコンピュータの利用形態として、文書処理、表計算処理、図形処理などの応用ソフトウェアの特徴と利用方法を知らせるとともに、応用ソフトウェアを選択して身の回りにある情報の処理ができることを目的としている。

②題材の指導計画と情意への働きかけ

学習内容	生徒の活動	育てたい関心・意欲・態度	情意への働きかけ
挿絵を描こう (図形処理ソフトウェア) (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 図形処理ソフトウェアの基本的な利用方法を理解する。 基本的な操作方法を身につける。 描いた図形を保存する。 感想交流する。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> 挿絵にコピー、ペースト、反転などの機能を使う。 作品を保存する。 完成した作品を見ながら、感想交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> 図形処理ソフトウェアの基本的な学習に進んで取り組もうとしている。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> 図形処理ソフトウェアを用いて主体的に「挿絵」を制作しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 図形処理ソフトウェアで描いた画像(まちがいがし)を提示し制作意欲を喚起する。 生徒の描いた作品を生徒機に転送して提示して、制作意欲を向上させる。 挿絵のある新聞とない新聞を提示して、挿絵の視覚的な効果を実感できるようにする。 完成した作品を提示して、感想交流して相互啓発する。
案内状を作ろう (文書処理ソフトウェア) (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> どんな案内状を制作するか決める。 文書処理ソフトウェアを使って文章入力し、文字飾りなどの基本的な操作を行う。 罫線、挿絵を挿入する。 作品を構成して、保存する。 完成した作品を見ながら、感想交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> 文書処理ソフトウェアの基本的な学習に進んで取り組もうとしている。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> 文書処理ソフトウェアを用いて主体的に「案内状」を制作しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校で配付される案内状を提示し、もらいたくなる案内状について考えられるようにする。 工夫してつくられた案内状と、文字だけの案内状を手にとって比較して、視覚的な違いを確認する。 完成した作品を提示して、感想交流して相互啓発する。
生活とアンケートのグラフを作ろう (表計算処理ソフトウェア) (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 表計算処理ソフトウェアの入力方法やセルを知る。 データを入力して、計算や並び替えをする。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> 簡単なグラフを作成する。 印刷の設定の仕方を知る。 作品を保存する。 完成した作品を見ながら、感想交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> 表計算処理ソフトウェアの基本的な学習に進んで取り組もうとしている。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> 表計算処理ソフトウェアを用いて主体的に「生活とアンケートのグラフ」を制作しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> コンピュータを使用してアンケートを行うことで、学習意欲を喚起する。 グラフ機能など便利な機能が簡単に扱えることを、各自に転送して視覚に訴え、実感させる。 川崎市の平均データと自分たちのデータと比較することで、学習意欲を向上させる。 完成した作品を提示して、感想交流して相互啓発する。
学校紹介新聞を作ろう (4時間)	<ul style="list-style-type: none"> レポートの題材アンケートを集める。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> データを入力して、グラフを作成する。 文字入力や図形の挿入、グラフの挿入をする。 文書処理ソフトで構成をする。 作品を保存、印刷をする。 完成した作品を見ながら、感想交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> いくつかの応用ソフトウェアを用いて主体的に「学校紹介新聞」を制作しようとする。 学習した内容を、生活に生かそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校紹介新聞を中学校体験に来る小学生に渡すことを伝え、制作意欲を喚起する。 クラス全員からコンピュータでアンケートをとる方法を示範して、制作意欲を向上させる。 完成した作品を提示して、感想交流して相互啓発する。

③感想用紙の評価

表5 評価規準と状況例(中学校技術分野)

評価規準	コンピュータでできることに興味をもち、学習した内容を生活に生かそうとしている。
Aと判断される状況例	記載量が増加し、コンピュータについて家庭や地域、学校生活における活用と結びつけて考えられるなど、行動しようとする姿勢が見られる。
Bと判断される状況例	記載量が増加し、コンピュータでできることに関する具体的な記述が見られる。

・メール・インターネット・オークション・けんさく・保存・印刷・文字を打つ・クリック・画像をとる・CD開ける&DVD見れる・HP作れる・ブログ作れる・お絵かき・キーボード練習

➡

・文書処理ソフトを使って案内状などを作る。(中略)
 ・パソコンを使うとしたら「何かを調べる!!」という事で利用しているのが多かったです、文書処理ソフトなどを使ってできることがたくさん見つけられました。私はペイントをふだんの生活に使いたいと思います。オリジナルキャラクター!?

図9 題材前後の記載内容の変容例(中学校技術分野:評価A)

書かれた内容を前述の規準で評価したところ、Aが25%、Bが75%、Cが0%となった。

題材初発の感想から題材終末の感想まで10時間の記載活動に取り組んだ。記載に当たっては、自分の心に浮かんだことを書くように強調した。生徒は記載活動に抵抗なく取り組んでおり、教師のコメントを楽しみにしている生徒も見られた。

題材の学習が終わり終末の感想を見たところ、初発の感想に比べて記載量が減った生徒は一人も見られなかった。増えた知識について羅列する生徒がたくさん見られたが、25%の生徒は生活に結びつけた内容を記載することができており、感想用紙による「関心・意欲」の育成や定着に効果があったと考えられる。

④アンケート結果

表6 題材前後のアンケート結果(n=27) 最大値4.0

題材前後の生徒へのアンケート結果では、「学習への取組」、「学習内容への関心」のまとめりで有意な向上が見られたが、「学習内容を生活に生かす意欲」や「生活で実践する態度」は、まとめりとしては有意な差が見られなかった。

	学習への取組	学習内容への関心	学習内容を生活に生かす意欲	学習内容を生活で実践する態度
題材学習前(標準偏差)	2.69 (0.84)	2.44 (0.90)	2.52 (0.76)	2.27 (0.84)
題材学習後(標準偏差)	3.05 (0.66)	3.22 (0.70)	2.83 (0.61)	2.59 (0.79)
t 値	2.42*	4.28*	2.02	1.81

*p<.05

⑤考察

技術の学習については、題材を通じて今までにできなかった操作や作品ができるようになったという実感から、学習が楽しいと感じた生徒が多くなった。また、目的を「小学生に中学校を紹介するための新聞を作る」としたことで生徒は明確に目標をもつことができ、そのことが積極的な学習活動につながったと考えられる。

学習した内容については、図形処理と表計算処理への関心や意欲に著しい向上が見られた。これは、図形処理ではお絵かきから発展して、コピーや貼り付けなどのさまざまな機能を実践することができ、表計算処理では計算やグラフ作成などが一瞬でできてしまうことを実感できたためだと考えられる。

しかし、文書処理に対する興味や関心は、図形処理、表計算処理よりも低い結果となった。生徒は、既に文書処理に慣れていたため、もう少し題材を工夫する必要があった。

また、学習後の「生活に生かす意欲」や「実践する態度」のグループについては、有意な差が見られなかった。これは家庭にコンピュータやソフトウェアがあるかどうかで、物理的に不可能な生徒がいることが理由の一つとして考えられる。しかし、「学習内容への関心」が高まっていることから、学習した内容を生活に生かそうとする姿勢はできてきているように考えられる。

(3) 中学校技術・家庭科 家庭分野

①題材の概要

題材名	「考えよう 快適で安全な住まい」
時間数	8時間
軸としたキーワード	「安心できる住まい」

中学生にとって住居は住んでいるところではあるが、これらの機能について理解し、より安全で快適な環境を整えようという気持ちにはなかなか至らないようである。健康で快適に住むためには室内環境を整える必要があることに気づかせるとともに、安全な住まいについても考えられるようにさせたい。家族が住む空間をよりよいものとするを日常的に考え、生活を工夫する力を育てることをねらいとして、この題材を設定した。

②題材の指導計画と情意への働きかけ

学習内容	生徒の活動	育てたい関心・意欲・態度	情意への働きかけ
住まいのはたらきを考えよう 家族と住まいのかかわりを考えよう (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 日本各地の住まいについて知る。 住まいの役割や基本的な機能について考える。 家族の生活によって住み方に違いがあることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本各地の気候風土や地域の特性にあわせた住まいや住み方の工夫について考えようとする。 住まいに関心を持ち、住まいのはたらきを考えようとする。 家族の生活と住まいのかかわりについて考えようとする。 生活の仕方に合った住まいの使い方を工夫しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 北海道や沖縄の住まいの写真を使い、気候風土や地域の特性を考えられるようにする。 住宅広告などの家の間取り図(模型)を使い、住まいの中で営まれている生活行為への関心を高める。
安全に住むためには (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> 家庭内で安全に住むために、具体的に改善する方法を考える。 防災マニュアルを作成し、家庭の避難経路や避難場所を確認する。 家の中、学校の危険な場所を点検し、安心して暮らせる住まいの工夫を考える。 備蓄倉庫の中を見学して備品について確認したり、非常食に触れたりすることで、災害が起きたときに、どのような備えが必要か考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 室内の安全に関心を持ち、家庭内事故防止や自然災害に配慮した生活を工夫しようとする。 防災対策に関心を持ち、必要な情報を防災マニュアルとしてまとめようとする。 いろいろな人の立場にたって危険な場所の点検に取り組もうとする。 災害に備えることに関心を持ち、備蓄倉庫の役割について考えようとする。 自分の家の防災対策を調べ、これからの生活に生かそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 阪神・淡路大震災のビデオなどを導入に使い、住まいの問題点の学習への関心を喚起する。 防災グッズや資料を提示したり、「我が家の防災マニュアル」づくりに取り組んだりすることで、安全に住むことへの関心を高める。 事故の起きやすい場所を図や写真で提示して、意見交換への意欲を高める。 防災グッズや非常食などに触れることで、防災対策を生活に生かそうとする意欲を高める。
快適・健康に住むためには (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 快適に心地よく健康に住むために自分の生活を具体的に改善する方法を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の生活の問題点を見直し、改善する方法を考えようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が見つけた校舎の不快感な場所を映像で見せ、快適に住むための改善策を考えられるようにする。
家族が心地よく住むために (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> 自分や家族が使う場所の汚れの落とし方、防災や防犯対策など心地よく住むための工夫を自分なりに課題をもって調べる。 (家庭実践) 実践報告会 	<ul style="list-style-type: none"> 自分や家族が使う場所を心地よくするための方法を調べ、家庭実践の工夫しようとする。 これまでの学習を意欲的にこれからの生活に生かそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 汚れ落としに使っている市販の洗剤や用具を実際に見せて、家庭で行っている汚れの落とし方などを思い出せるようにする。 家族からのコメントをもらい、家庭での実践を継続する意欲とする。 家庭実践についての感想を交流することで、提案内容への関心を高め、実践的な態度を育てる。

③感想用紙の評価

表7 評価規準と状況例（中学校家庭分野）

評価規準	安心できる住まいに関心をもち、学習した内容を生活に生かそうとしている。
Aと判断される状況例	記載量が増加し、安心できる住まいを家庭での実践と結びつけて考えられるなど、行動しようとする姿勢が見られる。
Bと判断される状況例	記載量が増加し、安心できる住まいに関する具体的な記述が見られる。

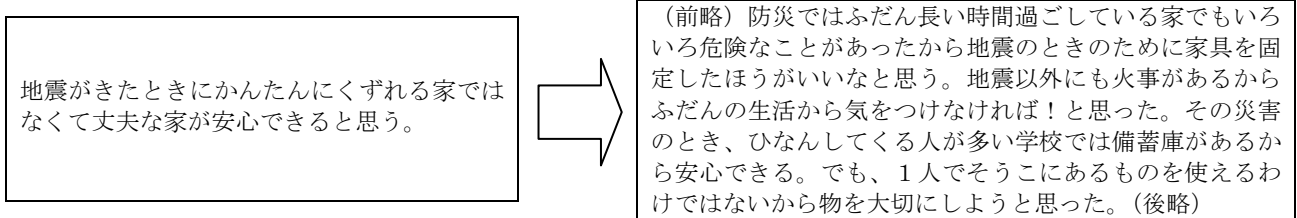


図10 題材前後の記載内容の変容例（中学校家庭分野：評価A）

書かれた内容を前述の規準で評価したところ、Aが33%、Bが57%、Cが10%となった。

ほとんどの生徒の感想用紙に記載量の増加が見られ、学習の深まりが感じられる内容のものも多く、Aと評価した33%の生徒は、生活と結びつけて記載することができていた。たくさん書けたことで、学習したことに対する達成感を得ている生徒も見られ、感想記載活動からも情意への働きかけができたと考えられた。

記載量が減った生徒が2人いたが、そのうちの1人は、初発の感想を取りとめなく書いたためであり、量は減ったが内容的には向上が見られた。もう1人は、記載量が減っており、学習した内容に関してもほとんど触れていない。これは、この生徒に適した支援を行うことができず、「関心・意欲」を育てることができなかつたためと考えられる。

④アンケート結果

表8 題材前後のアンケート結果(n=30) 最大値4.0

題材前後の生徒へのアンケート結果では「学習内容を生活で実践する態度」のまとまりのみに有意な差が見られた。項目ごとに見ると「学習内容への関心」や、「学習内容を生活に生かす意欲」のまとまりにおいても有意に向上した項目が見られた。

	学習への取組	学習内容への関心	学習内容を生活に生かす意欲	学習内容を生活で実践する態度
題材学習前 (標準偏差)	2.95 (0.71)	2.95 (0.76)	2.94 (0.82)	2.67 (0.73)
題材学習後 (標準偏差)	3.11 (0.69)	3.21 (0.71)	3.14 (0.67)	3.06 (0.70)
t 値	0.08	1.64	1.52	2.43*

*p<.05

⑤考察

「食」や「衣」の学習に比べて、「住」の学習では体験的な学習内容は少なく、自ら考えを深めていく場面が多い。情意への働きかけとしては資料を提示する方法が中心となったが、話し合いの場面でも積極的に意見を交換する様子が見られ、効果があったと考えられた。

すべてのまとまりにおいて数値的には向上が見られたが、題材学習前のアンケートの数値が高かったこともあり、有意な差として見られたまとまりは「生活で実践する態度」のみであった。

「学習内容への関心」や「学習内容を生活に生かす意欲」のまとまりの中では、「安全」に関する質問項目での向上が見られた。これは、学習を通して「家族が心地よく住むために」というテーマで家庭実践計画を立てる学習に取り組んだが、防災対策や安全について身近な問題として意識し始めた生徒が多く見られたためだと考えられる。いざという時の備えや家族との話し合いがほとんどできていなかったことへの驚きや、自分一人ではなく家族全員が安心して暮らしていくことの重要性を知る機会となり、「関心・意欲」をもつだけでなく、家庭生活で実践しようとする態度につながったように考えられる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から見てきたこと

(1) 「関心・意欲・態度」を育てる指導方法

本研究会議では、「関心・意欲・態度」を育てるために情意への働きかけとして、「感覚や感性を刺激する活動」と「継続的な感想記載活動」の2つの指導方法について題材を通した検証を行った。アンケート結果は検証した3校すべてにおいて「関心・意欲・態度」が有意に向上した項目が見られ、有意な減少が見られた項目は一つも無かったことから、実践した情意への働きかけが有効であったと考えられる。

①働きかけの内容と育つ「関心・意欲・態度」の関係

指導内容と「関心・意欲・態度」のアンケート結果を分析したところ、中心となった働きかけの内容によって違いが見られた。

小学校家庭科では、「学習への取組」の項目に向上が見られた。これは題材の導入段階の資料提示を中心とした働きかけに加えて、問題解決的な学習を取り入れて解決方法を探究する学習形態にしたことにより、「調べたい」という「関心・意欲」につながったと考えられる。

中学校技術分野では、「学習への取組」や「学習内容への関心」に向上が見られた。これは体験的な活動を通して「コンピュータの学習は楽しい」と感じさせるとともに、「小学生に自分たちが作成した新聞をあげる」という相手意識をもたせる働きかけをすることで、「わかりやすく相手に伝える」という目的意識が「関心・意欲」につながったと考えられる。

中学校家庭分野では、「実践する態度」で向上が見られた。これは防災や防犯に関するものを中心とした資料提示を繰り返し行うことで、「自分の家はどうだろう」という関心をもたせることと、防災マニュアルづくりや家庭実践に取り組む意識づけを行うようにしたことが、「態度」の形成につながったと考えられる。

これらのことから、「関心・意欲・態度」を育てるための情意への働きかけは、指導のねらいによって変えていくと効果的だと考えられた。具体的には、資料提示を中心とした働きかけを行うことで「関心・意欲」を喚起し、明確な目的意識をもたせた活動を取り入れて「関心・意欲」を育成し、学習内容の必要感を感じさせたり、家庭実践を取り入れたりとすることで「態度」を形成するようなケースが考えられる。

(2) 「関心・意欲・態度」の評価方法

感想用紙からの評価を実践することで、これまでとは違う視点から「関心・意欲・態度」の評価を行うことができた。授業中に表出する一時的な「関心・意欲・態度」を追いかけるのではなく、授業の中で育てた「関心・意欲・態度」を評価するというように発想を変換できたことが成果だと考える。

感想記載活動の課題は、書けない児童生徒にどのように支援を行うかということである。実際、初発の感想や2～3時間目までの授業の振り返りでは、まったく書けない児童生徒も見られた。

そこで、感想用紙に励ましのコメントをつけたり、授業で記載の仕方を個別に指導したりしたところ、検証した3校において題材の終わりにはまったく書けない児童生徒が一人もいなくなった。このことから、この評価方法を実践するときは、児童生徒が「書かないのか」あるいは「書けないのか」を見極め、書きたくても書けない児童生徒には適切な支援をすることが重要であると考えられる。

授業者と研修員で感想用紙を評価したところ、小学校の家庭科での一致率は89%であった。同様に中学校技術分野においては96%、中学校家庭分野においては83%と高い数字が得られ、この評価方法は妥当性が高いと考えられる。

2 今後の課題

「関心・意欲・態度」が有意に向上した質問項目の数には、題材によって大きな差があった。また、向上した数が多かった題材においても向上しなかった項目が見られ、向上しなかった項目は情意への働きかけが弱かったためと考えられる。情意への働きかけは特定の題材を対象にする指導方法ではないため、児童生徒の状況に合わせて働きかけの内容を常に見直していくことが重要であり、適切な働きかけを実践するという意味では課題を残した。

働きかけとともに言う言葉かけの重要性についても早い時期から着目していたが、本研究会議では検証することができなかった。しかし、意識的に言葉かけを行った授業においては、感想用紙からも児童生徒の「関心・意欲」の高まりが読み取れ、働きかけの効果を上げるために教師が意図的な言葉かけを追究することは非常に重要だと考えられた。

今後も、情意への働きかけを追究することで、児童生徒の「関心・意欲・態度」を育てる授業を実践し、生活における実践的な態度の育成につなげていく必要がある。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- ・ B. S. ブルーム著、渋谷・藤田・梶田訳『教育評価法ハンドブック—教科学習の形成的評価と総括的評価—』第一法規 1973年
- ・ 金井達蔵『中学校 関心・態度—その理論と指導と評価—』日本図書文化協会 1985年
- ・ 安彦忠彦『自己評価を生かした授業の創造』明治図書 1999年
- ・ 安彦忠彦他『新版現代学校教育大事典』ぎょうせい 2002年
- ・ 国立教育政策研究所「評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料(中学校)」 2002年
- ・ 長瀬荘一『関心・意欲・態度（情意的領域）の絶対評価』明治図書 2003年
- ・ 渋谷憲一『教育評価の基礎』教育出版 2003年
- ・ 尾崎 誠・中村祐治「技術・家庭科における『関心・意欲・態度』の評価に関する研究」日本教材学会教材学研究第16巻 2005年
- ・ 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会審議経過報告（平成18年2月13日） 2006年
- ・ 川崎市教育委員会・川崎市中学校教育研究会『中学校学習指導事例集技術・家庭科』 2006年
- ・ 川崎市教育委員会・川崎市小学校教育研究会『小学校学習指導事例集家庭科』 2006年
- ・ 中村祐治他編著『これならできる 授業が変わる 評価の実際』開隆堂 2006年

【指導助言者】

元横浜国立大学教授	中村 祐治
川崎市立小学校家庭科教育研究会長（川崎市立下河原小学校長）	伊藤 彰子
川崎市立中学校教育研究会技術・家庭科部会長（川崎市立枳形中学校長）	作佐部和彦
川崎市立中学校教育研究会技術・家庭科部会長（川崎市立南大師中学校長）	渡邊 洋子
川崎市総合教育センター指導主事	和泉田政徳
川崎市総合教育センター指導主事	江尻 孝美